

目的 繊維産業の発達に伴い、衣服素材も天然繊維から化学繊維にかわり、縫製も手仕事からマシナリ産業に転換した。かつての衣生活は「おふくろ」と呼ばれ女性性遣によって家庭に暖かさをもたらし、心の支えともなる仕事であった。使い捨ての時代に、木綿が庶民の生活に浸透する以前の衣服について、民俗服飾、被服構成学的立場から考察および意義あることと思われ。

## 調査事項

- 藤布-----織糸の太さの差が素朴な趣きを与えよ。スリット形態に素材の少ないものを用いて動作適応性を求めた苦勞がみられよ。
- 麻布-----長方形の布2枚を縫い合わせ、厚胎的形態に細くて短かい銀襷袖がつけられよ。硬い布に動作適応性を求め、菱形の袖下の裾に布の方向性を利用した知恵がみられよ。
- 紙布-----紙の物性を利用し涼しさを求めた形態。袖口、裾に肌ざわりのよさとデザイン効果を求めて紺木綿を縁取りする。日本人の心、日本夏の象徴が紺ではなからうか。
- 裂織-----日本海側に多いこの織物が福岡県行橋市、対馬にもみられたことは、交通の発達や文化交流を意味するのではなからうか。

まとめ 1.硬い素材に機能性を求めた女性の知恵と苦勞がにじんでいる。  
 2.袖口、裾に用いられた紺は、日本人の心、日本夏を象徴するとともに全体をひきしめるデザイン効果もあせている。  
 3.厚くて硬い布を用いては事着に防護に工夫をこらして、かつての女性の偉大さを知り、現在の衣生活を考え直したい。